

演劇プロジェクトとしての日本語劇

——授業から上演への実践報告——

齊木ゆかり

1. はじめに

本稿では、東海大学別科日本語研修課程「日本語劇」で実施した演劇プロジェクトを紹介することによって、通常の授業にも活かせるプロジェクトのいくつかの要素について提案する。

2. 演劇プロジェクトの問題点と解決法

「この授業では演劇をします。」と言うと、大概の学習者たちは「え〜」と嫌そうな顔をし、ひどい場合は、「遊びはいいから、勉強教えてください。」と言う。2017年までは東海大学別科日本語研修課程の上級クラスで選択授業科目の中に「口頭表現」があり、この授業を使って演劇プロジェクトを実施したところ、学生の中にはシラバスを読まずに受講し、まさか演劇をするとはと驚く場面もあった。そこで、科目名を「日本語劇」とし、科目と内容が一目でわかるようにした。つまり、「演劇？」という学習者たちは受講しなくてもいいですよ。」という状態にしたのである。日本語の授業で演劇を取り入れる理由は「演じる過程で、今まで気づかなかった自分、弱い自分に出会ったり、現実的な問題を解決する方法の糸口を知ること」とし、授業では体を使いながら意味と結びつけ、また、体を動かしながら個人的あるいは社会的問題について考えると、具体的な目標を以下の2点とした。

- (1) 日本語の発音、表現、語彙を身につける。
- (2) 人前で発表する自信がつく。

また、「発表会があり多くの皆さんに見せ、いい経験ができるので頑張りたい」とシラバスに記載することで本当に演劇と発表に興味がある学生だけが参加できるようにした。

3. 活動の実際

2018年度秋クラスの受講者は韓国・スウェーデン・台湾・ノルウェー・フィンランド・ロシアの15名、上演までに要した練習時間は開講日を含め5日間（100分×5回）の500分であった。

3.1. 日本語劇作成の際の教員と学習者の役割

短期間の準備で上演まで仕上げることができた理由は教員と学習者たちの役割分担と目標を明確に提示したことにある。今回の教員と学習者の役割は表1のように説明できる。

表1 日本語劇作成の際の教員と学習者の役割

教員	学習者
脚本家	アイデア提供者
演出家	表現者
マネージャー	マネージャー

3.1.1. 脚本家とアイデア提供者

教員は脚本家として授業の初日に1人2発話程度のシナリオを提示した。

A：秋か。平成の秋は今年が最後だって言うのに、まだ一人なのか。

B：秋か。後2ヶ月で今年も終わりか。

C：秋か。なんか、美味しいもの食べたい！

AB：おいおい。

C：何か？

D：下の食堂の甘辛丼（あまからどん）、なかなかだよ。あ、味噌（みそ）ラーメンもうまい。

AB：おいおい。

教員が作ったシナリオを提示することで、上演作品に対するイメージを学習者たちと共有することができた。その後、教員は学習者たちにシナリオを書く機会を与えた。すると、脚本の雰囲気を保ちつつ、自由な発想でいくつかのシーンが学習者たちから提案された。そのシーンと登場人物を組み合わせることでオムニバス劇「Hey Say 30 秋」が誕生した。「Hey Say 30 秋」は留学生の生活を切り取ったコメディ劇である。シナリオは巻末に載せた。

3.1.2. 演出家と表現者

授業初日に教員は同じシナリオで学習者全員に同じ役を演じさせた。目的は、表現、表出することの恥ずかしさと喜びを両方実感すること、他者から学ぶこと、この場は失敗していい安全な場であることを知ってもらうことにあった。そのため、あえて教員は助言はせず、学習者たちに自由に表現させた。学習者たちは提示されたシナリオを読み、ペアと練習し演じ、他者の演技を見ることで、シナリオの持つリズムと雰囲気理解できた。回を重ねるごとに教員の要求は大きくなったが、学習者も教員の期待に答えたり、あるいは反論を述べたりと白熱した稽古となった。

3.1.3. マネージャーとマネージャー

マネージャーとしての教員の任務はスケジュール管理、学習者たちの体調管理である。練習初日からすでにカウントダウンという緊張の日々であったが、あらかじめ学習者に上演日と場所の提示を行い、安心を保証するために、早い時期に本番会場のステージで練習を行ない、会場の雰囲気をつかませ、安心させた。また、学習者の体調管理を徹底し、風邪を引かないようにと注意を喚起した。このようにマネージャーとしての教員の仕事が時間かつ体調の管理であると述べたが、そういう意味では学習者たちも自分自身のマネージャーであったといえる。自己コントロールに努め上演日まで15名の学習者は1人も練習を欠席しなかった（上演後には早速2名の欠席があったが）。

3.2. 授業の実際

上演までの授業は以下のように展開した。

- 1 回目 演劇プロジェクトの説明と日本語劇練習 1
- 2 回目 日本語劇練習 2 演技の勉強
- 3 回目 日本語劇練習 3 ストーリー作り 本番会場での練習
- 4 回目 日本語劇練習 4 ストーリーの作り直し
- 5 回目 最終練習（ゲネプロ）
- 6 回目 日本語劇上演

1 回目 演劇プロジェクトの説明 劇練習 1

上演は「第12回東海大学国際フェア」の初日の「第1回東海大学外国語劇」で、ステージ付きの階段教室で行うことになった。日程は10月19日と決まっていたので、上演から逆算すると練習時間は5回しかないことがわかった。そこで、上演を意識した授業を1回目から行うことにした。教員は学習者たちに授業の目的を説明した後、ネームゲームをしリラックスした後で、教員が用意したシナリオ「秋だね」で演技練習をした。初めての練習で、学習者たちはぎこちなく、恥ずかしそうに練習していたが、4人で行うスキットで、セリフが少なく、台本を持って演技していいと伝えたため、ストレスが軽減され、学習者たち全員が日本語による演技を体験できた。

その後、学習者による第1回シナリオ作成をした。学習者たちがシナリオ作成する目的は、学習者たちの参加意識を高めることと、教員がシナリオを作成するためのアイデアの収集であった。学生たちにシナリオを書かせ全て任せるには時間的猶予はないため、初めから脚本家は教員と決めていた。しかし、クラスらしさは醸し出したい。そこで、教員は、学習者たちが提出したシナリオを読み、書かれた内容で似たような物を選び出し、ペアから4人組に構成し、リライトし、2回目の練習のために用意した。

2回目 劇練習2 演技の勉強

腹式発声練習「アエイウエオアオ」をした。発声練習の際、腹筋を動かしながら、目も口も大きく開けて練習をした。この練習はその後授業の最初に毎行った。発声練習の後で、1回目のシナリオを配布した。学習者たちが作成し提出した第1回シナリオを参考にしたため、自分が書いた状況や台詞が入ったシナリオに、学習者たちは喜んだ。学習者はシーンごとに分かれて練習し、教員は各グループを回って個別指導し、最後に全体で通し稽古をした。その際、「背中を観客に向けない」、「間を生かす」、「話していない時も演技中」、などの注意をした。その後、さらに劇を長くするため、学習者たちに第2回シナリオ作成をさせた。回収したシナリオは1回目と混ぜ、劇全体の流れを考え再構成し、発表順も替えた。この結果、学習者たちは1人が2つのシーンを演じることになり、13分程度の作品になった。

3回目 劇練習3 ストーリー作り

3回目にしてすでに終盤を見据えての練習となった。良い作品にするため、学習者たちからの提案で内容を変更した。

例) 傷心旅行に付き合う友達。最後に行き先を二人同時に「ロシア!」、「北海道!」と叫ぶ。

上記のように教員がシナリオを作成したところ、そのシナリオを読んだ学習者たちから、ロシア人が「北海道。」と発し、その後、韓国人が「ロシア……。」と呟くようにしたいというので、そうした。結果はよかった。

また、授業教室の近くにある本番会場の講堂が空いていたため、練習を講堂のステージで行なった。ステージの広さが掴め、さらに、ステージ上で声を通る学生とそうでない学生が明確にわかり、観客となった学習者たちから聞こえないのダメ出しがあり、真剣さがさらに増していった。

4回目 劇練習4 ストーリーの練り直し

3回目までは台本を持った状態だったが、この時点ではほぼ全員が暗記していた。しかし、棒読み、あるいは過剰演技だったので、教員からダメ出しをした。また、バラバラだった流れをストーリーによってさらに関連付け、ストーリーとしての一貫性を持たせた。

例) シーン5 性格が全然違うのになぜか仲のいい不真面目な学生と真面目な学生が漢字の試験について話す。不真面目な学生が試験の準備をしていない

ことがわかり、狼狽える。

シーン6 上記の二人。テストが終わって帰り道、互いに失恋したことが分かり、にわかに関いを意識し出し、コーヒーを飲みに行くことになる。

シーン7 (上記の登場人物たちがシーン7の登場人物たちとすれ違いざま気まぐず横を向くことで、一人が真面目な女の子の元彼と判明する) シーン7の登場人物たちは傷心旅行に行こうと友達と話し合う。

シーン8 人生を達観したシーン7の失恋男が友達の楽天ぶりをぼやく。

シーン5と6は同じ学習者たちが作ったシナリオで、最初に作ったシナリオは友達の一人が失恋した話であったが、友達同士両方が失恋したことにし、失恋話をした2人が急に意識し合うようなストーリーに書き換えた。その後、他のシーンにも失恋話があったため、二人は付き合い合っていたことし、関連を持たせることにした。さらにシーン7とシーン8をつなげることで更にストーリーのつながりを持たせた。

5回目 最終練習 (ゲネプロ)

授業で通し稽古をした後、当日は30分くらい舞台上で練習すればいいだろうと、学習者たちに問いかけたところ、「30分は短すぎる。1時間は必要だ。」とまさかの練習時間延長要求が学習者たちからあった。通常の授業なら、一体どこの誰が授業の通常時間以外に練習を要求するだろうか。そこには「観客にはもっといいものを見せたい。」「まだまだ練習が足りない。」「もっとしごいて欲しい (いや、これはない)。」という学習のプロ意識が生まれていた。そこで、上演前の空き時間に他の言語の劇団員たちと奪い合うようにしてステージでの練習を行った。

6回目 (金) 日本語劇上演

上演の時が来た。日本語劇は外国劇の2番目の作品として上演した。日本語劇以外の参加作品は、英語は授業で作成した英語ドラマの動画、韓国語は生涯学習グループと学生とのコラボ、フランス語とドイツ語は学生同好会からの参加であった。この日は国際フェアの初日の夕方で、ブースの関係者や近隣住民など約40名の観客を迎えた。日本語劇はこぞという場面で客の笑いが起こり、予想以上の、学習者たちの名演技に大きな拍手が起こった。

4. 結果と考察

この活動を行なったことで、授業の目的であった日本語の発音、表現、語彙を身につけることはできたのであろうか。また、人前で発表する自信はついたのであろうか。

(1)日本語の発音、表現、語彙を身につけたか

発声練習によって、口を大きく開けて腹式で発声練習をすることを厭わない習慣がついたと考えられる。毎回の儀式的行為が「見せる劇」を作るという具体的目的を理解した学習者たち

にとって、納得できる練習であったと考えられる。

日本語表現や語彙については、嫌悪感を表す「舌鎚」、たしなめる意味の「おいおい」や、縮約形の「なんたって」、気取った表現の「読みたまえ」、格言の「人生50」等を学ぶ機会になった。しかし、全て偶発的な学びであり、事前に準備されたものではなく、体系化されてはいなかった。しかしながら、この授業において、言語的目標を事前に示すことは、事前に教材が決定されている授業と違いがなくなり、結果として、学習者の好奇心や積極性の炎を消すことになるのではないと思われる。よって、今回のように内容によって扱う日本語の語彙や表現が変わる方法で行う方式が良いと考える。

(2)人前で発表する自信がついたか

学習者たちの声は普段教室で練習していた時と舞台の時とでは声の出し方が違っていた。声が大きくなるとともに態度も表情も豊かになっていった。しかし、上演が終わって、普段の授業ではまたいつもの学習者に戻っていた。それでも構わないと思う。大講堂で観客を前に演技したという経験はいつまでも学習者の心に残るだろう。この成功体験が将来、いざという時にきっと大きな助けになると考えるからである。

(3)演劇プロジェクトがふさわしい日本語学習レベルと留意点はあるか

今回演劇プロジェクトを実施したのは上級日本語学習者クラスである。上級日本語学習者とは、文法的にはほぼ問題がないが、母語の干渉を受け、母語表現を日本語に翻訳することもある学習者たちである。しかし、今回、学習者たちが示した日本語表現は、劇としての味があって好ましかったので、多くはシナリオに残した。もちろん、日本語らしく書き換えた表現もあるが、魅力的な表現の「アイス地獄」、「来年の私がダイエットする」、「人は本で知識を刈り取る」、「(冬が近づくと表現するのに)あ、蝶が死んでる」等の表現は、新鮮、かつ、的確にその場の雰囲気や感情に溶け込んでいたので、そのまま使わせた。このように創造的日本語表現にまで達することができるのは上級学習者だからであろう。では、初中級学習者にはこのプロジェクトは適さないであろうか。否。たとえ初中級学習者でも、チャンスがあれば、彼らの日本語力にあった劇を披露することは可能であると考えられる。観客を前にして演じるとなると、学習者たちはこちらが言わなくても練習量を増やす。すると自ずと語彙も文法も定着する可能性が高くなり、教育的意義も増すと考えられる。

ただし、プロジェクトとして日本語劇を実施するなら、上演場所を確保すべきである。しかし、上演場所を確保しても、集客できるとは限らない。大きな会場に観客数が一桁だと、侘しくなる。そこで、一番良い方法は何かのイベント会場で時間をもらって上演する方法である。留学生関連のイベント、例えばスピーチコンテスト、ガイダンス、入学式、修了式などが考えられる。

(4)日本語の通常の授業への応用はできるか

学習者が積極的に参加し、意見を述べ、もっと練習させてくれと、教員にとって天国にいる

ような発言が飛び出す授業，そんな日本語劇授業の雰囲気や普段の授業で作れないだろうか。試行錯誤の段階ではあるが，いくつかの提案ならできそうである。

①発表の場を設ける

演劇でなくてもいい。ポスター発表でも，スピーチ大会でも，詩の朗読でもいい。なるべく多くの観客を前に学習者が披露する場を作ることによって，学習者のための目標設定がなされ，学習者は燃える。

②少しだけ恥ずかしい経験をさせる

学習者には恥ずかしい体験をさせるべきである。ここでいう恥ずかしさとは，苦手なこと，したことがないこと，例えば，変顔，奇妙な動作，インプロなどである。安全な場が教室であるなら，そこで恥ずかしい体験をして，その時の自分の気持ちに気づき，その気づきを他者と共有することで，挑戦することを厭わない状態になる。当然，教員も一緒に行く。

(5)教員にとっての演劇マインドとは何か

今回のプロジェクトにおいて，教員は脚本家，演出家，マネージャーであったが，同時にまず団員であった。すなわち，一緒に何かを作り上げる，達成する仲間であるという意識を持った。そして，積極的に意見を述べ，かつ，学習者に助言を求めた。この一方的でない状態が学習者が意見を言いやすい状態を作りあげたのではないだろうか。普段の授業でもこのように双方が意見を言える環境を作ることは可能である。

5. おわりに

本稿では，東海大学別科日本語研修課程「日本語劇」での活動を紹介することによって，口頭表現授業の可能性について論じた。プロジェクトが成功するための条件は，(1)発表場所の確保と恥ずかしい体験をさせること，(2)教員は脚本家，演出家，マネージャーでかつ団員であること，が挙げられる。つまり，教室という閉じた世界でなく教室の外で発表という場を使って自己表現する機会を与える，これが大きな学習の原動力になる。今回劇を見に来た観客数は40名程度であったが，この後行う劇の会場には200人を超える観客が集まる。留学生によるスピーチコンテストの幕間で劇を披露するからである。学習者たちは早速次の上演作品のための練習にとりかかっている。

参考文献

齊木ゆかり (2013) 「口頭表現授業におけるドラマプロジェクトの試み」『日本語・日本語教育の研究：その今，その歴史』スリーAネットワーク pp.54-63

付録

1. 教員が最初に提示したシナリオ「Hey Say 30 秋」

A：秋か。平成の秋は今年が最後だって言うのに、まだ一人なのか。

B：秋か。後2ヶ月で今年も終わりか。

C：秋か。なんか、美味しいもの食べたい！

A B：おいおい。

C：何か？

D：下の食堂の甘辛丼（あまからどん）、なかなかだよ。あ、味噌（みそ）ラーメンもうまい。

A B：おいおい。

2. 学習者たちが提示したシナリオを材料にリライトした「Hey Say 30 秋」

シーン1

A：秋だね。

B：寒くなったね。

A：そうだね。でもあったかいセーター着て、ホットチョコレート飲むのは秋が一番！

B：私は、紅茶。それも、夫が作った美味しいジャムを入れるんだ。

A & B：最高！

シーン2

A：ち！また、雨か。雨って、傘持ってる時は降らなくて、持っていないときに限って降るんだよな。

B：雨か。毎朝起きてアイス地獄、朝のシャワーって冷たいし、それに、外に出てもう一回雨のシャワーを浴びなくちゃ、やっと教室についたら、100%靴の中はプール状態。

C：ねえねえ、また台風来るらしいよ。昨日寝ちゃってレポート終わってないよ。誰か見せて！

D：また、雨～。雨の日って、なぜか眠いんだよ～。

A & B & C：でももうすぐ授業始まるよ。

D：無理～。

シーン3

A：秋か。今年もダイエットしよう。あ、でも、金魚のパン食べたい！

B：日本でそれ、たい焼きって言うんだよ。ダイエットの敵だよ、たい焼きは。

A：いいのいいの。来年の私がダイエットするから。

B：そうだよな。なんたって、

A & B：食欲の秋！

シーン4

A：はしたない。韓国では読書の秋と言ってさ、本が読みたくなるんだ。

B：何言ってんだよ。そういうキャラじゃないでしょ。読書の秋じゃなくて、飲み会の秋じゃない

A：とんでもない！君！農作物を刈り取るように、人は本で知識を刈りとるんだよ。君も本を
読みたまえ！

B：読んでるよ。漫画とかピー本とか！（AはBの口を抑える）

A：最悪だなお前！

シーン5

A：（ゲームしながら）あ右、あ左！行け！行くんだ！そうそう、最高！！

B：余裕だね。

A：そうでもないよ、なかなかクリアできないんだ。

B：でも今日のテストはクリアできるんだね。

A：なんの話？

B：漢字のテストがあるじゃないか！長松谷先生の。

A：ええ？！あと1時間しかないじゃないか。最悪！！

シーン6

A：秋は嫌い！

B：どうして？美しい季節じゃないか。例のかっこいい恋人とデートに行ったらいいじゃん。

A：別れた。

B：そっか、寒くなるね。

A：あなたにも恋人いるじゃない。あの元気な可愛い子。

B：あの子にはもう疲れた。

A & B：（お互い見つめて、ハッと目をそらす）

シーン7

（シーン6の登場人物の一人とシーン7の登場人物がすれ違いざま気まずく目をそらす）

A：秋だ。

B：うん？

A：（近くの木を見ながら、なにも言わない）

B：どうした？なんかあった？

A：いや、なんでもない。

B：水臭いこと言うな。友達じゃないか。

A：別れた。

B：そっか、またか。……旅でもしょうか。

齊木ゆかり

A：うん，北がいい。

B：北海道。

A：(首を横に振って) ロシア！

シーン 8

B：もう25歳か。人生50というから，もう半分なのか。なんか寒くなって来た。

A：なに年寄(としよ)り臭(くさ)いこと言ってんだよ。ああ，暑い！

B：秋だというのに，半袖，半ズボン。

A：そうさ，俺は燃える男！火のような男！

B：(震えながら) さぶ！

シーン 9

A：空が高くなったね。

B：秋だ！

C：旅行行きたい。

A：台風多いよ。第一，お金ある？

C：それを聞くか！

B：山登りは？

A C：お金かからない！！

A：いいね。お弁当作って行くよ。

B C：ツナマヨ！！

C：よし！富士山！！

A B：富士山？！

シーン10

B：ジャジャーン！

A：ど，どうしたのそのファッションセンス。

B：ハローウィン。気合い入れちゃった！

A：うん，気合いはわかる。とっってもホラーだもん。

B：これ着て渋谷行こうか。

A：でもそれ着て小田急線は乗らない方がいい。

B：いいじゃん，そうだ。ペアにしよう。

(A B同時に)

A：ペア？ B：ペア！

シーン11

A：どうしたの，学校行かないの？

B：行きたくないんだよ。バイトもしたくないし、ただ、家にいたいんだよ。
A：でもね、学校へ行くと役に立つよ。いろんな新しいこと、知りたくないの？
B：知りたい！でも行かないで、知りたい！
A：それは、無理！頑張っって通ってね。ところで大学の授業料の請求書来た？
B：ううん、きてない。
(A B同時に)
A B：来てない?!
B：ということは、退学！ん？ってことは学校へ行かなくていいんじゃない。
A：じゃ、帰ろう！

シーン12

A：あ、蝶（チョウ）が死んでる。
B：花も枯れたね。もうすぐ、冬か。
A：太陽も見えない。
C：でも秋は栗の季節。焼き芋もかぼちゃも美味しい。ああ、ココアも！
A：そうそう、日本には美味しい食べ物たくさんあるよ。
B：アイスクリームも美味しい！
A B C：(顔を見合わせ一呼吸置いて) 行く？
A：やっぱり、
(全員舞台上に集合して)
全員で：秋だね!!



写真1) 2018年第1回外国語劇出演者による記念写真